ギンメッキゴミグモの飼育装置の改良と体色遺伝性の検証

○繁宮悠介1・中田兼介2（1長崎総科大，2京女大）

　円網性のギンメッキゴミグモは、体色は黒と銀のまだら模様を呈し、その比率は個体間で変異に富む。体色の進化や多型維持機構を検証するには、その遺伝性を確かめる必要があるが、円網性のクモ類の飼育には様々な困難がある。ギンメッキゴミグモの飼育は、孵化個体を集団で飼育ケースに入れ、ライトトラップで集めた微小昆虫を直接導入することで成熟させることが可能であるが、生存率は5％程度と非常に低い。これは悪天候による物理的影響や餌の不安定な餌の供給、侵入動物による撹乱などが、飼育状況下での造網率の低さをさらに押し下げることで死亡率が上昇すると考えられる。この研究では、3年間の飼育結果から気象や季節性の影響を検証するとともに、足場の異なる3タイプの飼育ケース間での造網率や生存率を比較することで、生存率を上げる飼育方法を検討する。また、成熟個体数が蓄積したことにより、体色の遺伝性についてより詳細な分析ができるようになった。とくに野外から採集した親個体とその娘の体色比較だけでなく、飼育個体同士を人工交配して得られた親子間の結果も含めることで、本種における体色発現のメカニズムを検討する。